

小説部門 課題作品

「千日手」

松浦寿輝

『ものたはむれ』より

「あーあ、駄目だなあ、おじさん。それじゃ頭に歩を打たれて只取りじゃん」と隆司君は嬉しそうに叫び、ずり落ちかけていた黒縁の眼鏡の眉間のところに左手の人指し指を当ててくいと上げる。「〃香は下段に打て”って言うんだぜ。知らないの？」この「おじさん、知らないの？」というのが隆司君の口癖で、小憎らしいやつと思わないでもないけれど、どこか育ちの良さを漂わせたこの少年の得意そうな笑顔には冷たい優越感のようなものがかけらもないので、つい釣りこまれて榎田の顔もほころんでしまう。

「ほら、ここに歩でしょ。取る一手でしょ。もう一つ歩でしょ。そしたら只取りじゃん。すみませんねえ、じゃあ有難くいただきやすー」

「持ってけ持ってけ、そんなもん」と榎田は虚勢を張るが、これは誰から見ても負け惜しみにか聞こえまい。「そんなけちな香なんか、最初からくれてやるつもりだったんだから」

「強がったって駄目だよん。もうこれで金銀香に桂が二枚だもん。フツフツフツ、もう先は見えってしまったね、明智君」

そんなことでまた榎田は負けてしまう。だがいつもいつも情けなく負けてばかりなのはともかくとして、この生意気盛りの小学生を相手に将棋盤を挟んで過ごすひとときが榎田の生活の数少ない愉しみの一つであることに変わりはない。* * *将棋倶楽部」は靖国通りから細い路地をいくつか折れ曲がったわかりにくいところにあり、廃屋ともつかぬ二階建ての古い木造アパートの二階の摩り切れた畳の部屋に禿げちよろの座卓を並べて細々と営業している。真夜中過ぎま

で開いている将棋クラブというのはあまり普通ではないような気もするが、そもそも駒の動かし
かたを知っているという程度のことです。将棋が趣味というわけでもなく、これまでその手の施設と
はいっさい縁がなくてきた榎田には、普通はどうかといっても判断のしようがない。

あれはもう何年前になるのか、終電がなくなってしまう時刻に仕事が終わった榎田は、急に温
くなった初夏の夜の風に誘われたのか何となくそのまま家に帰る気になれなくて、四谷三丁目の
交差点からふらふらと歩き出し、深夜の街をさまよっているうちに、小さな古い家が立てこんだ
窪地の一角で街路灯に照らされたこの「**将棋倶楽部 **荘二階」の小さな看板がふと目に
留まったのだった。将棋のクラブなどに足を踏み入れた試しのない榎田がなぜそんなところに寄
る気になったのか、不思議と言えばまさにことに不思議なことではあるけれど、心も軀もざわざわと
波立ちやすい季節のことでもあり、何か自分でも抑えようのない人恋しさが募っていたのもし
れぬ。

間違いなく戦前に建ったものだろう今にも崩れそうなその「**荘」の玄関は開けっ放しで人
の気配がなくて薄暗い明かりが灯っているばかりだ。そのまま勝手に上がって来いということ
なのか。半信半疑のまま土間に靴を脱いだ榎田は、上がりかまこ框のすぐ正面に見えている階段に足を
掛け、ぎしぎしと音を立てながら昇ってゆき、昇りきったところから右に伸びているやはり薄暗
い板張りの廊下を恐る恐る進んでいった。住んでいる人もあまりいないのか両側に並ぶドアの奥
はどこまで行っても奇妙に静まりかえっている。そのいちばん端のドアに「**将棋倶楽部」の
表札はたしかに出ている。ほとほと戸を叩いても返事がないので思いきって開けてみると、分

厚い老眼鏡をかけてテレビを見ていた七十恰好の親父が目上げて胡散臭そうな一瞥をじろりと送ってよこす。あの、どうなんだろう、将棋を指させてくれるのかなとおずおずと訊いてみる。ええ、まあ、いいですけどね……と面倒臭そうに言うその親父以外にはしかし、将棋盤を脇に寄せてマンガ雑誌に読み耽っている小さな男の子しか見当たらない。リュウちゃん、お相手してあげてと親父に言われて、はいと素直に応じて榎田と一局指してくれたその少年が隆司君で、榎田はその最初のときから軽く負かされてしまったものだった。

指し終えたのはもう午前二時近くになっていたはずで、君、明日は学校だろう、いいのかい、こんなに遅くまで起きていてと言うと、いいんだもん、宿題だってやっちゃったしというのが隆司君の返事で、勝負がつくや否や読みかけのマンガ雑誌にまた鼻を突っこんでしまう。榎田はお茶を一杯貰い、ささやかな席料を払ってまたぎしぎしと階段を降りてゆき、妙な経験をしたなあと狐につままれたような思いで外に出た。深夜の街はしんと静まりかえり、ただ満月に近い月が冴えざえとした光をあたりに漲らせているばかりだった。

それ以来、榎田は「**将棋倶楽部」にときどき顔を出すようになった。それまでは仕事が終わった後どこかでちよつと遊んでいきたい気分になっても、酒を呑む場所の雰囲気が好きではない榎田にはどこにも行く当てがなくて途方に暮れたものだが、この晩以来、真夜中過ぎまで開いている「**将棋倶楽部」が恰好の寄り道になった。そもそも陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地の南側と言ったらいいのか、新宿御苑の東側と言ったらいいのか、大京町、左門町、住吉町、舟町、荒木町といった古風な町名が残っている新宿区のこの辺りの一角は、空襲を免れて焼け残ったとおぼし

いごたごたした路地裏だの、ゆるやかな起伏だの、小さな鳥居を立てた神社だのがあちこちにあり、昔から榎田が好んで散歩の足を伸ばす界限だった。たしかこの辺りは明治の頃は貧民窟のようなものもけっこう点在していたのではなかったか。そんなことを言うと今この界限に住み着いている人々は腹を立てるかもしれないが、要するに気おけない「細民」たちの街なのであり、その日その日の気苦労をその日その日のささやかな愉しみでやり過ごしてゆく智慧を身に着けた「細民」が住んでそれなりの歳月が経った街というものは決まって、ある何とも言えぬ懐かしい匂いと味わいを帯びてくる。真っ直ぐ家に帰る気になれなくて、しかもバーの類にも寄りたくない、若者が集まるようながちゃがちゃした場所に行きたくないということになると、結局は自分の好きな街をぶらつくといったこと以外に時間の潰しようがなく、そんな時に榎田の足はよくこの界限に向かったものだった。そしてあの初夏の晩以来、そうしたとりとめのないぶらぶら歩きの行程にとりあえず結び目のようなものが出来たわけだ。

それにしてもあの廃屋のような木造アパートの二階に立ち寄るのがいつでも決まって深夜ということになってしまったのはいったいなぜなのか。「**将棋倶楽部」は榎田にとって夜の場所だった。実際、いつだったか午後の早い時刻にふと空いた時間が出来て、靖国通りを折れていったのだがどこをどう間違えたものか「**将棋倶楽部」にはどうしても辿り着けなかったのである。ところがそれが深夜の散歩だとあたかも足が覚えているといった具合に、これ以上自然なこともないかのように、意図したわけでもないのに路地から路地へとすると道を辿ってふと気がつくといつの間にか「**荘」の前に出てしまっているのは奇妙だった。しかし奇妙と言えば、

そんなふうにして榎田が通りすがりにふと立ち寄るといった趣で階段をぎしぎし上がったゆき

「**将棋倶楽部」に顔を出すと、どんな夜更けであろうが必ずと言っていいほどのこまっしやくれた眼鏡の小学生が居合わせて、所在無さげにしているのもいかにも奇妙なことではあった。

リュウジというのは竜次と書くのか龍二なのか、訊いてみたことがないのでわからないが隆司君だと榎田は勝手に決めていた。「倶楽部」に行くたびに手合わせをした人々の中には、――榎田のヘボ将棋ではいずれにしても大概は負けてばかりだったが――受験勉強の息抜きに来ているといった風情の若者がいたり小粋な浴衣掛けの老人がいたり榎田自身と似たような雰囲気を漂わせた中年男がいたり、種々様々で、しかし今となってみると誰も彼も影が薄い印象でもう顔も声も覚えておらず、冗談口を叩けるほど親しくなったのは結局、最初のうちこそ人見知りしていたようだがすぐに榎田になつておじさん、おじさんと呼びかけながらよく喋るようになった隆司君だけだった。そもそも「**将棋倶楽部」はいつ行ってもだいたいのにおいて閑散としていて、榎田が迷いこんだいつだかの最初の晩のように、テレビに見入っている無愛想な爺さんの店主以外には隆司君しかいないということも珍しくなく、その店主にしてもちよつと頼むなどと曖昧に呟いてぷいっとどこかへ出かけてしまったりする。そんなとき二人きりで取り残された榎田と隆司君は、薄い座布団の上に胡座をかき将棋盤を挟んで向かい合いながら、勝負もそっこのけへらず口を叩き合つて時間を潰す。

「玉の早逃げ八手の得」って言うんだぜ。おじさん、知らないの？」だの、「桂の高飛び歩のえじき」って言うんだぜ、知らないの？」などという隆司君の突っ込みを適当にあしらいな

ら、生き生きと動く少年の表情に見とれているのが思いがけない愉しみになり、柄にもなく何か父性愛のような感情が湧いてきたりしたのだろうか。訝って榎田は苦笑した。榎田には子供がなくまた自分の子供を欲しいなどという気持ちになったこともなかったが、こんな子供なら一緒に連れて山にでも行き、テントの張りかただの鱒の釣りかただのを教えてやったりするのもしぞかし楽しかろうなどと思わぬでもない。老いというものとはまだほど遠い年齢の榎田だが、彼自身の人生が徐々に生気を失いつつあることと裏腹の気持ちの動きなのだろうか。しかしそれにしても、小学生が真夜中過ぎまで将棋のクラブに屯たむろしているのを許しておく親というのもいささか非常識ではないかと榎田は思い、「君はこのアパートに住んでるのかい」と尋ねてみたこともあったが、「うん、前はね」などという曖昧な受け答えでどうも要領を得ない。

初めてこの「*将棋倶楽部」を見つけた晩と同じような生暖かい初夏の宵のこと、例によって親父は出ていってしまい、榎田は隆司君と二人きりで将棋を指していた。隆司君は珍しく黙りがちで、差し手も鋭さを欠き、どうやら榎田の方が押し気味と言ってもいいような形勢になっている。

「あのね、夢でね、泳いでいるんだよ」持ち駒の歩を人差し指と中指の先でつまんでかっちゃん、かっちゃんと卓の上に打ち鳴らしながら隆司君が言う。

「ふーん」

「海でもプールでもなくて、川なのかな。どんどん押し流されていくみたいなの」

「へえ。おい、この銀取っちゃうぞ」

「そこ、角が効いてるんだよ。でね、水がね、何だかねっとりしていて、水飴みたいな、葛餅みたいな、すごく変な感じなの」

「で、目が覚めたらおねしよしてたんだろう」

「厭だなあ、おじさん、真面目に聞いてよ。そいで、どんどんどんどん流されてってさ、だんだん早くなってきて、あっヤベーって思っているうちに、滝になってるところにきちやったの。そのまま、どどどーって落ちちゃってさ」

「ふーん」と榎田は曖昧に受けるが、隆司君の表情にいつもの明るさがなく沈鬱な翳りが漂っているのが気にならないでもない。

「すごい高いところからどどどーって……。でもね、その落ちる途中で、今度は急にゆっくりになってくるんだよね。真っ逆様に墜落していくのに、どんどんスローモーションになってって、それから水も、いよいよ水飴みたいにねばねば、ねとねとしてきてさ。目にも耳にも、鼻にも咽喉にも、びたびたに……。息がすごい苦しくなってきた。そいで、とうとう軀が止まっちゃうの、滝になって落ちてく途中のところ。そのとき僕、このまま、ずうーっと、ずうーっと、ここで固まったまんまだってことがわかつちやった。空中で、真っ逆様のまんまで。……。永遠ってそういうことなんだよね」

「永遠……？」「思いがけない言葉が出てきたのに榎田は不意を打たれた。

「永遠って、いつまで経っても終わらないってことでしょう。何百年も、何千年も、何万年も、何億年も、宙吊りになって、こんなに息が苦しいまんまで……。何て怖いことなんだろう。僕、ぞ

おっとして背中に鳥肌が立っちゃった。でも、怖いとか厭だとか苦しいとか、そんな僕の気持だつてほんの一瞬のことでしょう。鳥肌が立つとか、助けてーってわめくとか、そんなのも一瞬のことでしょう。そんなの何にもならないんだよ。何しろ永遠っていうのは何億年も続いて、それからその何億年の何億倍も続いて、それでもまだ終りが無いんだから」今まで知っていた隆司君とはまるで別人のようだった。

「永遠ねえ……」何と言ったらよいものか榎田は当惑したが、「でもいいじゃないか、目が覚めたらおしまいなんだからそんなこと。永遠なんて、ないんだよ。ただ人間が想像して、あるような気がするだけなんだよ。夢から覚めればこうやって将棋指したり、マンガとかテレビとか学校とか、楽しいことばかりだよ」

「夢なんだけどね。でも、もし夢が本当で、本当が夢だったら……」

「何でさ。夢は夢、本当は本当だよ。ここにこうやってリュウちゃんがいて、僕と将棋指してるわけだろ。それから、どうやら君の飛車の逃げ場がなくなりかけてるわけだろ」と笑いかけてみるのだが、眼鏡のレンズの奥で瞳をうるませている少年の顔は蒼いままで、顔も軀も一回り小さくなり不意に幼くなったように見える。そう言えば、今まで考えてみたこともなかったが何年か前に初めて会ったとき以来、どうしたわけかこの子はちっとも大きくならないようなのだ。

「本当……。本当はね……」隆司君はそこで言葉を切って、少しの間ためらった。その先を聞きたくないという気持が不意に榎田の中で動いたがそのときにはもう少年の血の気のない唇が動いて、小さな、だがきっぱりした声が彼の耳に届いていた。「本当は僕はい、ない、んだよ」

何を馬鹿な、といったことを言いかけて言葉を探しながら榎田は隆司君の哀しそうな目を見つめていたが、少し間を置いてから少年が「おじさんもでしょう」と言ったときそれこそ背筋にぞおっと鳥肌が立ったのは今度は榎田の番だった。するとそれをきっかけに隆司君の顔の全体が徐々にその哀しそうな目と同じ色になってゆき、榎田がうろたえているうちに、さらに少年の軀の輪郭そのものが不意にすうっと薄く透き通ってその背後のアパートの壁が透けて見えるようになった。それに続いてその壁や柱や屋根もまた薄く薄く滲んでいって、こんもりした緑に覆われた廃墟の街の光景が四方八方から迫ってくるようなのだ。そう言えば榎田はこの廃屋のような建物の玄関や廊下で誰かとすれ違ったためしがないし、「**将棋倶楽部」以外の部屋に人が住んでいる気配を感じたこともない。こうして野ざらしになって、俺はこの子と永遠に将棋を指しつづけるのか。いや、この子はいなくて、俺一人でか。いや、本当は俺もいなくて、街も何もなくて、「永遠」だけが実在して……何億年も続いて、それからその何億年の何億倍も続いて、それでもまだその千日手には終りがなくて……鳥肌が立つ。髪の毛がそそけ立つ。だがそういう自分の軀の体感それ自体が幻にすぎないのだとしたら。どうやら今夜も満月らしく冴えざえとした白い光が、その光だけがあたりを皓々と満たしている。